様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１７９２２３４

研究課題名（和文）慢性肝疾患から肝細胞がんへ移行する患者への患者教育・支援システムの構築

研究課題名（英文）A System to Educate and Support Patients with Chronic Liver Disease Developing Hepatocellular Carcinoma

研究代表者
山田　隆子（YAMADA, TAKAKO）

岡山大学・保健学研究科・助教

研究者番号：６０３８２３６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，慢性肝疾患から肝細胞がんに移行していく患者を対象にした患者教育・支援システムの構築を行うこととその効果の検証とした。効果検証の為に，教育の前と１ヶ月後と2ヶ月後に面接とアンケート調査を実施した。教育中の患者の様子については，承諾のもとで録音しデータ化し，分析対象とした。本システムを利用した患者は 36名であった。面接とアンケート調査の分析をした結果，教育体制に課題はあるものの，教育内容に患者は意義を感じていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, a system to educate and support patients with chronic liver disease developing hepatocellular carcinoma was created, and its effects were examined through interviews and a questionnaire survey before and 1 and 2 months after education. During education, patients' statements were recorded, with their consent, to collect data for analysis. The number of patients who used this system was 36. Analysis revealed that, although systematic challenges remained, patients considered the content of education informative.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：慢性肝疾患　肝細胞がん　患者教育　患者支援システム　システム構築

１．研究開始当初の背景

肝細胞がんは平成19年には約34,000人の死亡者を出しており[1)]，その人数はがんによる死亡者の第上位を占めていることから比較的一般的ながんであることがいえる。慢性肝疾患から肝硬変へ移行し肝細胞がんを発症するため，他のがんに比べがんの発症がある程度予測できる。そのため，慢性肝疾患発症からがん発症を食い止めることが重要であり，がんの早期発見・早期対処を目指し，診療部門において定期的な診療や研究を進めている。肝細胞がん発症の背景疾患として最も発症率の高いウイルス性肝炎については，感染状況の把握と早期対処を求める国の呼び掛けが行われ，国をあげてウイルス性肝炎の撲滅，しいては肝細胞がんの減少を目指している状況にある。看護領域においても肝細胞がん患者を対象とした研究が進められてきており，苦痛の体験，病みの軌跡，患者の療養行動と心理など徐々に療養体験の中身が明らかになってきた[2)～5)]。しかし，どれもウイルス性肝疾患からがんを発症したケースに限局されている。生活習慣病の肝臓での表現系である非アルコール性脂肪肝炎（NASH）は，今後も確実に増加すると考えられており[6)]，ウイルス性肝疾患に限局せず，慢性肝疾患からがんに移行し，終末期を迎えるまでを肝細胞がん患者の一連の療養生活をしてとらえ，がん発症や異常の早期発見への介入が必要と考えた。

筆者は，平成 19～20 年度文部科学省科学研究費の助成（若手研究(B)，課題番号：19791715）を受け，慢性肝疾患からターミナル期における患者の病みの体験プロセスを明らかにした。その結果，病みの体験が5期（Ⅰ期：肝治療生活が常態化する時期，Ⅱ期：がん告知による混乱の時期，Ⅲ期：常態化する肝がん治療へ期待する時期，Ⅳ期：治療変更による再常態化の時期，Ⅴ期：終末認識を持つ時期）で構成されていることが明らかになった[7)]。また，研究対象患者が在院した病棟看護師にインタビューを行い，肝細胞がん看護への課題について分析を行ったところ，「患者への指導不足」「肝臓のイメージ化の工夫が必要」「患者が語ることでの意思の確認」が導き出された[8)]。これらの研究結果から，患者のデータと看護師のデータを統合し，療養目標を立て，患者教育・支援プログラムを構築した。本プログラムを実施するために，慢性肝疾患，肝細胞がん患者へ移行する患者教育・支援システムの構築として，個別指導を行うための肝臓病相談支援室を設置し，その実証を本研究の目的とした。肝臓病相談支援室とは下記の定義とした。

＜肝臓病相談支援外来とは＞

慢性肝疾患から肝細胞がん患者へ，患者の病みの体験プロセス[7)]に準じて，肝臓病教育等を行う部門の名称とした。肝臓病教育とは，肝臓の機能，肝臓病の病態生理，治療の流れ，日常生活での留意点などを個別指導として行う。その間に，療養生活を困難とする諸問題を，患者主体とし解決できることを目指し，患者の QOL の向上をめざす。患者への教育内容は，医師との連絡票（依頼シート）に基づき，双方に連携をとりながら教育内容を決定する。初回面接時に，調査を含め 30 分～1 時間程度の教育を行い，次回外来時（入院時）

とそれから 1 カ月後に経過フォローをした。教育的介入するのはそれらの 3 回とした。

引用文献

1）厚生統計協会編集.国民衛生の動向.第 56 巻第 9 号.2009

2)雲かおり,太湯好子.肝臓がん患者の苦難の体験とその意味づけに関する研究.川崎医療福祉学会誌.Vol12(1).91-101.2002

3）内田真紀,稲垣美智子.HCV 由来肝硬変･肝がん患者が語る病みの経験.日本がん看護学会誌.19(2).39－46.2005

4）平松知子,泉キヨ子.C 型肝炎由来のがん患者が辿る肝炎診断から現在までの心理と療養行動.日本看護研究学会雑誌.28(2).31-40.2005

5)林かおり,藤野文代.高齢癌患者の QOL に注目した看護ケアの検討-肝細胞がん患者５事例を通して-.群馬大学保健学科紀要.20.63－68.1999

6)島俊英,水野雅之,岡上武.肝がんの疫学と今後の動向.総合臨床‐肝がん撲滅へ向けて‐.57(6).1688‐1692.2008

7）山田隆子，名越恵美，藤野文代．慢性肝疾患から肝細胞がんに移行する患者の病みの軌跡．日本看護福祉学会誌．15(2)．2010

8）山田隆子，名越恵美，藤野文代．肝細胞がん患者に対するケアの様相―看護師の語りからー．日本ヒューマンケア科学会誌．(3)１．2010

２．研究の目的

慢性肝疾患から肝細胞がん患者へ移行する患者教育・支援システムの構築として，肝臓病相談支援室を設置し，その実証すること

３．研究の方法

（１）構成メンバー

＜肝臓病教育システム検討会＞

教育システム運用に関する主要な方向性を決定することを目的とした部会とした。構成メンバーと役割は下記の通りである

主任研究者：山田隆子

役割；研究活動の実施，本システム責任者

診療部門責任者:肝臓専門医１名

役割；診療部門責任者

看護部門責任者：看護師長２名

役割；看護部門責任者，主要病棟責任者

＜肝臓病教育システムワーキンググループ＞

肝臓病教育システム検討会メンバーに加え，病棟・外来などの関連部署や対象患者の調整を行う部会とし，部署のスタッフで構成した。

診療部門：肝臓病専門医１名

看護部門：外来統括師長１名，消化器内科病棟師長２名（臨床研究担当者以外の者），外来看護師２名，消化器内科病棟看護師（３病棟）５名

（２）対象者選出方法

肝臓専門医を受診する患者全員に，肝臓病相談支援室開室についての案内用紙を配布し，研究協力の参加を自由意思によって募った。申し出のあった患者に対して，対象者となりうるか否か，また対象者となった場合，患者に不利益はないかを，医師が検討した。対象者となった場合は，所定の連絡票（依頼シート）に必要事項を記入の上，内科外来担当看護師経由により，研究者から研究に関する説明書を用いて説明の後，介入を開始した。

（３）対象選出から教育実施までの流れ

肝臓病相談支援室で計3回の面談・アンケート調査を行う。各期別・教育介入前後で，患者インタビューデータ，FACIT-Sp（慢性疾患患者の霊的尺度）とHLC尺度（主観的健康統制感），自作式アンケート調査（教育内容の効果を主観で答える内容）の変化を見た。介入までの流れは，以下のとおりである。

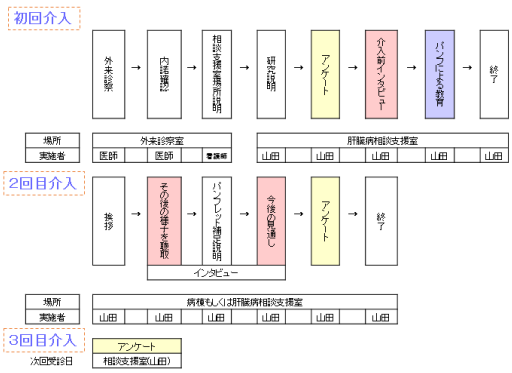

図１．介入までの流れ

初回面談；研究対象者によるアンケート記入の後，研究者からパンフレットなどの媒体を用いた説明を行いつつ，療養生活に対する対象者の質問に対応する。その内容を同意の上

で録音し，インタビューデータとした。

2 回目面談；内科外来・もしくは３部署の専門病棟で，初回面談の追跡フォローを行った。その際，アンケート調査，面談による患者の反応をインタビューデータとして記録した。

3回目面談；２回目面談から約1ヶ月後に外来にて実施した。その後の経過や肝臓病相談支援室への感想を聞き，その内容をインタビューデータとして記録し，その後アンケート調査も行った。

（４）研究期間

①システム構築のための準備期間

平成21年4月～平成23年8月

②肝臓病相談支援室開室頻度と場所およびデータ収集期間

開室頻度：週２日，場所：内科外来

データ収集期間：平成23年3月～同年9月

（５）倫理的配慮について

岡山大学大学院保健学研究科看護学分野倫理審査委員会（T10-10）および研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た後に，対象候補者に対して研究の目的と方法，研究参加の任意性と中断の自由，個人情報の保護，不利益の回避，データの保管と管理および研究終了後の全データの適切な方法による破棄，本研究に限ったデータの使用，診療録の閲覧，結果の公表について研究者が説明し，署名による研究参加の同意を得た。

４．研究成果

（１）対象者概要

病期別の対象者人数は表１に示した。対象概要は表２の通りで平均年齢は 66.1 歳であった。

表１．病期別の対象者人数

	初回	2 回目	3 回目
Ⅰ期	23 人	16 人	1 人
Ⅱ期	2 人	2 人	0 人
Ⅲ期	4 人	1 人	1 人
Ⅳ期	6 人	3 人	1 人
Ⅴ期	1 人	0 人	0 人
合計	36 人	22 人	3 人

Ⅰ期：肝治療生活が常態化する時期，Ⅱ期：がん告知による混乱の時期，Ⅲ期：常態化する肝がん治療へ期待する時期，Ⅳ期：治療変更による再常態化の時期，Ⅴ期：終末認識を持つ時期

表２．対象者概要

項目		度数	
性別	男性	14	(38.90%)
	女性	22	(61.1%)
診断名	慢性肝炎	20	
(病期)	慢性肝炎，肝細胞がん	1	
	肝硬変	4	
	肝細胞がん	4	
	肝不全	7	
機能低下原因	ＡＩＨ	4	
(重複あり)	ＮＡＳＨ	1	
	ＰＢＣ	3	
	アルコール	3	
	脂肪肝	3	
	Ｂウイルス	4	
	Ｃウイルス	20	
	原因不明	1	

初回は合計36名の協力が得られた。２回目の追跡調査では，22名の協力が得られ，14名が脱落した。脱落理由は，2回目に当たる日が研究期間・研究実施曜日を逸脱していたことがあげられる。病態が安定している患者は，次回の受診までの期間が３か月空いていることもあり，３回の調査が難しいこともあった。また，研究実施機関は，地域医療支援病院であり，病病連携・病診連携を行っているため，研究実施期間内で３回目を実施することが難しい状況であった。

（２）肝臓病相談支援室の効果

２回目に行ったアンケート調査によると，肝臓病相談支援室での教育についての対象者の反応は図２の通りであった。教室での教育を受けた後，「肝臓病の機能」「検査データ」など指導した内容に関する関心や理解がどの程度変化をしたかを問うた内容である。「とても変化した」から「まったく変化なし」の４段階に加え，対象者の年齢や理解度なども考慮し，「わからない」も加えた５項目で回答を得た。その結果，「とても変化した」「まあまあ変化した」と回答した対象者は，「適度な運動」以外の項目で半数以上を示しており，概ね効果が見られたと判断できる。

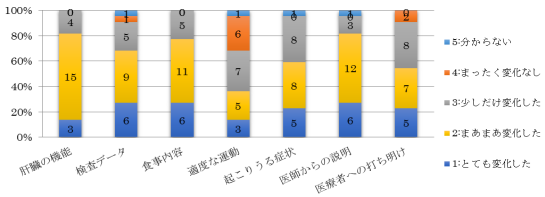

図２．肝臓病相談支援室での説明を受けた後の変化の程度

また，インタビューでは，「病気について話せる場があってよかった」「生活に即した話を聞けた」「医師に聞きそびれたことを確認できた」「病気のイメージがついた」など効果的であったことを示す反応が見られた。しかし，「診察が終わってからの時間はきつい」など，肝臓病相談支援室の効果的な運営について課題があることも明らかになった。また，初回面談では１回の教育に有する時間が１時間弱であり，多忙な臨床現場では実施が厳しい状況にある。今後に継続していくためには，一般的な病態・治療の説明などは，診察の待ち時間に待ち合い場でDVDを流すなどし，時間と教育内容の効率化が必要であると考える。

５．主な発表論文等（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>山田隆子</u>・大浦まり子，肝疾患患者の看護経験を持つ看護師を対象とした「肝疾患患者への教育パンフレット」妥当性の検討，日本慢性看護学会雑誌，第７回日本慢性看護学会学術集会プログラム・抄録集，A115，2013 査読有

〔学会発表〕（計１件）

①<u>山田隆子</u>・大浦まり子，肝疾患患者の看護経験を持つ看護師を対象とした「肝疾患患者への教育パンフレット」妥当性の検討，日本慢性看護学会，2013.6.29，兵庫県神戸市

〔図書〕（計０件）

該当なし

〔産業財産権〕

該当なし

○取得状況（計０件）

該当なし

〔その他〕・〔ホームページ等〕

該当なし

６．研究組織

(1)研究代表者

山田　隆子（YAMADA TAKAKO）
岡山大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：60382363

(2)研究分担者：該当なし

(3)連携研究者：該当なし

(4)研究協力者（研究実施当時）

倉敷中央病院

消化器内科部長	守本洋一
消化器内科主任部長	下村宏之
内科外来師長	橋本信子
消化器内科病棟師長	井上礼子